

レジリエンスをまじめに考える

畠山 武道

最近、「レジリエンス」という言葉を聞く機会が多くなった。そこで、レジリエンスの意味を、まじめに（誠実に）考えてみよう。

さて、resilienceをランダムハウス英和辞典で引いてみると、「弾力、復元力、回復力、立ち直る力」などと訳され、「立ち直る力は日本人の主要な特徴だ」という例文まで付いている。レジリエンスは、一九七〇年ころから心理学で使われるようになり、一九九〇年代に生物学で普及した概念（言葉）である。最近では、防災工学、建築学、経済学、社会学、法学（アメリカに限る）などでも、広く使われつつある。ここでは、レジリエンス概念が広まるに至った背景を、自然と人間（社会）の関わりに注目し考えてみよう。

ところで、自然と人間の関係に関するこれまでの考えは、人間が自然をよく知り（理解し）、慎重に管理することができれば、自然はゆつくりと進出し、安定に向かうというものであった。ここでは自然と人間との共存と進歩という楽観的な未来が保障されている。しかし、この単純な歴史観（進歩史観）には、最近多くの疑問がよせられている。

第一に、一九七〇年頃までは、自然の均衡

や安定を重視する静態的な自然観が主流であったが（クレメンツの極相理論やオダムのホメオスタシス理論）、一九八〇年代になると、自然（エコシステム）は複雑に変化する多数のシステムから構成されており、変化を予想することは不可能であるという考えが強くなってきた。自然は安定しているようで、実は内部で常に変化しており、不確実なことが多すぎるというのである。

第二に、自然と人間の関係も決して安定したものではなく、自然はときには人間からの影響に過敏に反応し、暴走し、人間の生存基盤そのものを破壊させることが分かってきた。このように自然界と人間界が相互に影響しあい、それぞれ独自の状態に向かうことを「共進化」とよんでいる。共進化という考えにたつと、人間（社会）は、自然に過大な影響をあたえることを慎重に回避しつつも、自然の予測不可能な振るまいによる社会への打撃を最小にするために、その対応能力（レジリエンス）を高めるべきであるということになる。概略、このような考えを、「社会―生態的レジリエンス」「社会―生態システムのレジリエンス」とよんでいる。

では「社会―生態的レジリエンス」を高めるためには何が必要か。もっとも重要なことは、共進化によって（意図的あるいは偶然に）作られてきた多様な自然、文化、知識、技術、生活スタイルなどを維持することである。生態系や文化の多様性は、権限の分散や自立を促し、住民の参加意識を高めることになる。また、未知の問題に対処するために、知識の蓄積と学習をくり返し、試行錯誤（順応的な対応）をくり返すことも重要である。

アメリカでレジリエンス概念に注目が集まった大きな理由は、ハリケーン・カトリナなどの大災害への対応を通してアメリカ社会の脆弱さが露わになったことである。対照的に、日本の大震災については、地域社会のきずなの強さに対して世界中から称賛がよせられている。しかし、レジリエンスは、心構えや心構えではなく、社会システムの問題であることに注意するべきである。

こんなことを考えていると、「レジリエンスの構築・しなやか、強靱な社会 提案」という新聞記事を目にした。しかし提言の内容は、余分な電力供給装置の必要性、二重・三重の高速道路・新幹線の建設、国家機能の分散など、土木工事のてんこ盛りであった。レジリエンスは、自然と人間の関係を問う直すものであり、本当の意味はもつと複雑で奥深いものである。レジリエンス概念を国土強靱化対策の錦旗にさせないために、その意味を「まじめに」考える必要があるとおもう。

へはたけやま たけみち・早稲田大学法務研究科教授